

山田 俊弘

本論文は、17世紀デンマークの学者ニコラウス・ステノ（1638-1686）の地球論を中心として、デカルトの『哲学の諸原理』（1644年）に発し、ライプニッツの『プロトガイア』（1691年執筆・1749年刊）に至る17世紀地質学革命の様相を克明に再構成し、さらにはステノの種々の地質学的論考のラテン語テキストを邦訳して提供してなった極めて卓越した研究である。

山田氏は、まず17世紀の地球論が、デカルト『哲学の諸原理』の思弁的方法のみならず、ガッサンディの遺著『哲学集成』（1658年刊）を特徴づける経験主義的方法に起源をもっていたことを確認する。また、ステノがウァレニウスの『一般地理学』（1650年）から学ぶことから独自の地質学的思索を始め、学生時代の草稿『カオス手稿』（1659年）や『温泉論』（1660年）には、すでに後年の成熟した地球論の萌芽が見られることを確かめる。さらに、画期的な『サメの頭部の解剖』（1667年）や『プロドロムス（固体論）』（1669年）には、キルヒヤーの『地下世界』（1665年）、フックの『地震論』（1668年）、師の一人に数えられるエラスムス・バルトリンの『氷州石の実見』（1669年）と同様の地平に立った知的努力が見られるとの認識を得ている。そして、ステノの地質学的知見が、哲学者のスピノザの懐疑主義的聖書観と対照をなし、またライプニッツの地質学に確かな影響を及ぼしていたことをも解明している。

総じて、近代自然科学が生誕した科学革命の時代とされる17世紀の地質学が、天文学革命ほどドラスティックではないが、前時代の大航海時代に開始された地理学的認識の一新の影響を受けた「地理学的転回」と呼ばれるべき大きな変動として捉えられるべきことを確認し、アメリカの歴史家グラフトンのいう「歴史革命」の確かな一環をなしていたと主張している。

本論文の独創的貢献をもっと詳細に個別的に述べれば、以下のようなになるであろう。

(1) 17世紀西欧の地球論の中核部分を、ステノのラテン語テキストを地道に解読することによって明らかにしたこと。

(2) デカルトの思弁的方法のみならず、ガッサンディの懐疑主義的・経験主義的方法が地質学においても影響力をもっていたことをステノの著作を検討することによって解明したこと。

(3) 16～17世紀に起こった「歴史革命」の一環として地質学の認識の転換は理解することができ、天文学における革命ほどではないが、地質学の認識転換もが科学革命の重要な構成要素として捉えられることを示したこと。

本論文は、その研究手法の地道さと研究射程の広大さによって際立っている。提示した地質学理論の認識論的基礎をもっと先鋭に剔り、地質学史のその後の発展をも捉えていれば、論文はもっと壮大な読み応えある作品になっていたかもしれない。けれども、山田氏はそのことを十分に理解しており、また本論文の地道な学問的姿勢の範囲で十分以上の包括性を打ち出している。審査委員全員は、本論文をもって学位取得のためには十二分であると判断した。本論文は、山田氏が世界的に第一線に立ちうる科学史家であることを示した。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。